慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴジラ：日本的な、あまりに日本的な
Sub Title	Godzilla : Japanese, all too Japanese
Author	萩原, 能久(Hagiwara, Yoshihisa)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2012
Jtitle	Booklet Vol.20, (2012.) ,p.34- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Godzilla and Astro Boy 2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000020-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴジラ
── 日本的な、あまりに日本的な

萩原　能久

1　ゴジラ・シリーズ

世界でも最も有名な、日本映画の代表格といっても過言ではないのが1954年（昭和29年）に公開された『ゴジラ』である。以後、ゴジラが登場する一連のシリーズには『ゴジラ映画』という独自のジャンル名まで与えられ、再編集された版や短縮版、ハリウッドでリメイクされ、名誉あるゴールデンラズベリー賞最低リメイク賞を受賞したアメリカ版『GODZILLA』などを除くと全部で28作が制作されている。もっとも各作品のあいだにストーリーや世界観の連続性があるかというと、かならずしもそうではない。前作品を踏襲したものもあることはあるが、根本的に世界観がリセットされている、つまりこれまでの話は「とりあえずなかったことにしてください」という身も蓋もない宣言を行っているに等しい2作品である1984年の『ゴジラ』と1999年の『ゴジラ2000ミレニアム』をターニング・ポイントとして全作品を3期に分けて分類するのがこの業界の常識となっている。その3つは一般的に

第1期：昭和ゴジラ
第2期：平成ゴジラ（vsシリーズ）
第3期：ミレニアム・シリーズ

という名称でゴジラ・フリークには親しまれている。

しかしながら第1期に分類される「昭和ゴジラ」シリーズは、全部で15作品と過半数を占めているし、主役として登場するゴジラの位置づけに、シリーズ中でも特筆に値する大きな変化が見られるので本稿では、映画史上に残る不朽の名作、54年版の『ゴジラ』を別格として扱い、すぐその半年後に味を占めて制作された「逆ゴジ」から64年の「モスゴジ」までを第1期草創期、同年のお正月映画として制作された「三大怪獣」から71年の「ヘドゴジ」までを第1期中期、72年の「ガイゴジ」から以後10年間もの沈黙に沈む75年の「メカ逆ゴジ」までの4作品を第1期停滞期と呼ぶことにしたい★1。

草創期の3作品の特徴を一言でいうなら、「怪獣対戦モノ」ということにつきるだろう。第1作「初ゴジ」はシリーズ中、唯一の例外といってよい特徴がある。つまりこのゴジラだけが、人間の手によって、つまり芹沢博士の発明したオキシジェン・デストロイヤーによって葬り去られているのだが、この作品に登場する怪獣はゴジラのみである。これに対して、「逆ゴジ」ではゴジラの宿敵、あるいはよきライバルともいえるアンギラスが登場し、以降、日本の怪獣映画の最大の特色となる怪獣同士の対戦という形が定着する。（この意味するところは第3章で分析したい。）

私が中期と分類したいのは「三大怪獣」以降である。もっともこの作品に登場する怪獣はゴジラ、モスラ、ラドン、それにキングギドラの4体である。このうちのどれか1体が「大怪獣」の名に値しない雑魚だというわけではない。宇宙からやってきた侵略者の手先、キングギドラに対して、地球防衛のためにすでに映画ファンにはおなじみとなっている地球の三大怪獣、ゴジラ、モスラ、ラドンが一致結束するというモチーフが強調された結果である。この映画ではゴジラは何故かモスラに怪獣語で「説得されて」侵略者と戦うのだが、以後のシリーズではゴジラは様々な怪獣の侵略から日本を守ってくれる守護神という立場になる。それとともにゴジラスーツの顔つきもおぞましさを強調した「敵」の顔からどこか愛嬌のある「友」の顔へと変身していく。極めつけは「大戦争ゴジ」に登場する「シェー・ゴジラ」であろう。当時日本で爆発的にヒットしていた赤塚不二夫の漫画『おそ松くん』に登場するイヤミが驚いたときに見せる、手足を曲げながら「シェー」と叫ぶギャグが国民的なものとなっていたのだが、どこでこの『おそ松くん』を読んだのだろうか、この作品中ではゴジラがシェーをしてみせるのである。

私が停滞期に分類する4作品の特徴は、ゴジラの戦闘相手が怪獣そのものというより、その怪獣を操って地球征服を企む宇宙人や海底人であるという点だ。ゴジラの設定も日本を守ってくれる守護神という立場からさらに「ウルトラマン化」し、地球を守る子どもたちのヒーローとして描かれている。この頃になると観客動員数も3作目の「キンゴジ」が1255万人のピークを迎えた頃から凋落を続け、この4作品はすべて200万人を割り込んでいる。第1期にとどめを刺す「メカ逆ゴジ」は100万人にすら届いていない。まさに停滞期の停滞期たるゆえんである。

およそ10年の沈黙を破って1984年に復活した「84ゴジ」は第1作目の「初ゴジ」のストーリーのみを踏まえ、それ以降の作品はなかったものにする…つまりリセットしたリメイク作品である。その5年後に「ビオゴジ」が公開され、これまたゴジラ・シリーズ伝統の「対決もの」（ただし、基本、一対一の対決である点に特色がある）として1991年の「ギドゴジ」以降は正月映画として95年の第22作「デスゴジ」まで毎年1本のペースで製作された。

この第2期の平成ゴジラ、別名vsシリーズの特徴は、その世界観がシリーズ全体で一貫しており、「84ゴジ」で見られた原点回帰の「恐ろしいゴジラ」のイメージ、まさに破壊神ゴジラが最後まで持続したことであろう。

2度目のリセットが決行されたのが、アメリカ版の悪評を受けて東宝が再制作に乗り出した1999年のシリーズ第23作「ミレゴジ」である。ここでも過去に存在したのは54年の「初ゴジ」で描かれた歴史だけである。しかしこの第3期のミレニアム・シリーズで世界観の連続が見られるのは「機龍ゴジ」と「GMMGゴジ」だけである。もっともこのメカゴジラは第1期停滞期に登場してきたメカゴジラとも、第2期に登場してきた、国連のゴジラ対策センター、通称Gフォースが、前々作にあたる「ギドゴジ」で海中に沈んだ23世紀製のメカキングギドラを引き揚げ、その未来技術を解析して作った対ゴジラ兵器ともまったく異なる設定である。第1期のそれはブラックホール第3惑星人が地球侵略のために、ゴジラに対抗するべく作り上げたロボットであったが、ミレニアム・シリーズのメカゴジラは特生自衛隊（自衛隊の中に設置された対特殊生物戦闘専門の部隊）が完成させた対ゴジラ戦用の秘密兵器である。映画のなかではメカゴジラの名称は用いられておらず、三式機龍、あるいは単に機龍と呼ばれているが、それは基本的に第1作においてオキシジェン・デストロイヤーによって絶命した初代ゴジラの骨格を東京湾より引き揚げてそれをメインフレームとして作られたサイボーグであった。余談だが、筆者が個人的に全ゴジラ・シリーズに登場してくるゴジラのライバルのなかで一番好きなのは、釈由美子が操縦するこの三式機龍である。

興行的にはまったく失敗に終わったのが第3期ミレニアム・シリーズで、低迷のあまり、2001年から2003年までは『とっとこハム太郎』と併映で公開された。しかし、特に2001年の「GMKゴジ」は、後に再述するが、全シリーズ中、そのおどろおどろしさにおいて群を抜く作品であり、日本中のお母さんやちびっ子たちを敵に回す逆効果すらもたらしてしまう。

ミレニアム・シリーズ全体の特徴として、CGの多用が挙げられるが、不興なままついに第28作目の「GFWゴジ」で終焉を迎える。アメリカで新たにリメイクされるとのうわさが現在あるようだが、脚本家が急に変更になるなど、前途は多難なようである。途中で脚本家が交替してヒットした映画など存在しないからである。

2　ゴジラとは何か？

ゴジラを論じようとするかぎり、必ず答えられなければならない中心的問いがふたつ存在する。第1のものは、「ゴジラとは何か」という問いであり、第2に重要なのが「ゴジラはなぜ日本ばかりを襲うのか」である。

第１の問いは簡単なようで、簡単でない。水爆実験によって目を覚ました古代生物（1）と答える人もいれば、恐竜が放射能を浴びて巨大化したもの（2）と答える人もいるだろう。いや、核実験で巨大化したのはとっくに死滅した恐竜などではなくイグアナだ（3）という人もいるはずである。それどころか、いやゴジラは幽霊にすぎない（4）と考える人もいるだろう。実はこのすべてが正解なのだ。

（1）の答えは第１作目の「初ゴジ」の正確な描写である。この作品ではゴジラは大戸島近海に出没する伝説の怪物である。この怪物が出没すると、魚は食い尽くされ、漁をしても雑魚１匹とれなくなる。古生物学者の山根博士はこの伝説の怪物は今から 200 万年前、ジュラ紀から白亜紀にかけて生息していた、海棲爬虫類から陸上獣類に進化しようとする中間型の生物であると国会で説明し、これを大戸島の伝説にしたがってゴジラと名付けたのである。ちなみにジュラ紀は正しくは２億１千万年から１億４千万年ぐらい前までの時代であり、そんな基本的なことすら間違えるこの山根博士の発言はとても古生物学者のものとは思えない。もっとも 200 万年前というのは猿人から原人への移行の時代であり、つまり恐竜などとっくに死滅して、ヒト属が登場してくる時期である。後に論じるように、ゴジラ＝人間論を前提にするならば、この「誤謬」は示唆的である。いや、わざとなのかもしれない。それは置くとして、ここで注目しなくてはいけないのは山根博士がこのゴジラに関して、「放射性物質を浴びて巨大化した」などとの説明を一切行っていないということである。ゴジラはそれまで、海底の洞窟にでも潜んで暮らしてきたのだが、これがたび重なる水爆実験によってその生活環境を破壊され、安住の地を追い出されて出現したと山根博士は主張していたのである。

他方（2）の答えは第２期の vs シリーズのゴジラに対する答えである。ゴジラの前身、つまり放射能を浴びて巨大化する前の姿はラゴス島でひっそりと生活していた恐竜、ゴジラザウルスである。ゴジラはこのゴジラザウルスがビキニ環礁の核実験の放射性物質を浴びて巨大化した姿として描かれている。もっとも、「ギドゴジ」では、ゴジラ誕生の阻止を狙った未来人の手によってこのゴジラザウルスはベーリング海に転送されてしまう。しかしここに未来人たちの大誤算があった。地球の放射性物質汚染は彼らの想像以上で、海洋に投棄された放射性廃棄物によって転送されたゴジラザウルスは、いずれにせよゴジラ化してしまったからである。以降の第２期、vs シリーズでは基本的に、このゴジラ像が下敷きとなっている。

（3）の答えは言うまでもなく、アメリカ版『GODZILLA』についてのものである。しかも、この辺にアメリカ人の図々しい責任転嫁が窺えるのだが、イグアナが GODZILLA に巨大化してしまう原因となった水爆実験はアメリカによるものではなく、フランスによるものである。このゴジラはただ、ちょっとでかいだけで放射能火炎★2 なども吐かない。ただの生物なので、簡単に米軍のミサイル攻撃によって制圧されてしまう。

ゴジラのアイデンティティを根底から破壊してしまったのが（4）の答えであり、この「衝撃の事実（？）」は第３期の「GMK ゴジ」で明らかにされた。この作品では挑発的にもアメリカ版 GODZILLA に対して、「アメリカじゃ、ゴジラと名付けたけど、日本の学者は認めていない」と若い、自衛官ならぬ「防衛軍軍人」に語らせているシーンが冒頭にある。いずれにせよ、この作品中ではゴジラが繰り返し日本にやってくる理由、そしてどのような兵器を用いてもゴジラを殺すことができない理由として、ゴジラが実は太平洋戦争で命を落とした人たちの魂、残留思念の集合体であるという驚愕の事実がはじめて明らかにされる。誤解されてはならない。ゴジラは「英霊」なのではない。無念の死を遂げた英霊たちだけでなく、戦争の犠牲になったアジアの人々、アメリカ兵、原爆で亡くなった日本の一般市民、これらの魂の無念の思いがひとつになって実体化したのがゴジラであるとの秘密が明かされたのである。

実は、この「ゴジラ＝亡霊」論は現実の映画作品よりも前に展開されていた議論でもあり、「GMK ゴジ」は逆にその説を取り入れる形で映画化されたのではないかと私は考えている。おそらくこの説を最初に唱えたのは文芸評論家の川本三郎だと思われるが、彼は次のように自説を展開していた。

> 『ゴジラ』は「戦災映画」「戦渦映画」である以上に、第二次世界大戦で死んでいった死者、とりわけ海で死んでいった兵士たちへの「鎮魂歌」ではないのかと思いあたる。“海へ消えていった”ゴジラは、戦没兵士たちの象徴ではないか★3。

川本はゴジラの最期に戦艦大和の最期を重ね合わせて、さらには「東京の人間たちがあれほどゴジラを恐怖したのは、単にゴジラが怪獣であるからという以上に、ゴジラが“海からよみがえってきた”戦死者の亡霊だったからではないか」とまで書いている。この川本説は第２の重要な問い、つまり「ゴジラはなぜ日本ばかり襲うのか」に対する答えともなっている。ゴジラは南太平洋からひたすら東京を目指し、銀座を炎の海に変え、国会議事堂を破壊し、その周辺を徘徊はするのだが、突然踵を返して再び海に帰って行く。

> 戦争で死んでいった者たちがいままだ海の底で日本天皇制の呪縛のなかにいる。ゴジラはついに皇居だけは破壊できない。これをゴジラの思想的不徹底と批判する者は、天皇制の「暗い」呪縛力を知らぬ者でしかないだろう★4。

この川本説を受けてさらにそれを敷衍しているのが民俗学者の赤坂憲雄で

ある。赤坂は三島由紀夫の『英霊の聲』と重ねあわせ、天皇の裏切りを主張している。

> ゴジラが皇居の周囲を巡ったすえに背を向け、南の海に還ってゆくのは、そこにはもはや、死者たちの魂のもだえを鎮め癒してくれる者がないことを悟ったからではないのか★5。

皇居には自分たちを戦場に送り出した現人神はもういない。だからこそ、その贖罪役を果たすために、死者たちと同じく戦争の傷をかかえて隠棲の途、つまり現世的な生からの退却を選んだ若き天才科学者、芹沢博士はみずからの命を差し出さなければならなかった。しかし、そのような１人の人間の人身御供では最終的に数百万の行き場を失った魂の鎮魂が完遂されるすべもない。だからこそゴジラは何度も日本に襲来するのだ。赤坂はこう分析するのである。

この赤坂説に寄り添いつつ、さらに手厳しい戦後日本社会批判を展開しているのが『敗戦後論』で論壇の注目を集めた加藤典洋である。彼が断罪しようとするのは、ひとり天皇のみではなく、英霊たちにきちんと向き合ってこなかった戦後日本人である。もっとも彼は、まだ「初ゴジ」当時の日本人には、まだ次のような両義性の感覚が共有されていたと見る。

> 国民の義務として国の命令に応じ、戦争に赴き、国を守るため尊い命を落とした。しかし、その戦争は、いまの日本から見るなら明らかに恥ずべき側面を多く持つ悪しき侵略戦争であった。（中略）では、尊い祖国の防衛のための犠牲者であると同時に侵略戦争の先兵でもあったこれらの戦争の死者を、どのように考え、どう彼らと向き合うべきなのか★6。

しかしこの加藤の憤りが昂じ、次のようなことまで彼が主張するとき、彼が最終的には何を欲しているのか分からなくもなる。

> 戦後、日本国民は、米国によって一人免責され、民主的な「人間宣言」を行った昭和天皇を筆頭に、いっせいに「民主化」に応じ、三一〇万にも及ぶ自分の国の戦争の死者たちを裏切った。それが国際的に非民主主義国の教導の成功例とされるあの「民主化」の、戦後日本における国内的な意味である。敗戦までは、これらの死者は、自分たちの国を守り、憎き敵である米英の兵士と戦い、その末に、また非道な都市爆撃により、命を落とした哀悼の対象であった。そして戦後も、彼らはなお恥ずべき侵略戦争の先兵であると同時に、同胞の盾となり、自分たちの国のために死んだ両義的な死者であり続けるはずだっ

た。しかし生き残った日本人が「民主化」により、日和見主義的かつ足早な仕方で民主主義者に宗旨替えすると、彼らにとり、これらの死者は、一転して、宙に浮いた扱いにくい存在となる。その死が、何のためだったのかは、誰にもはっきりとは答えられない。こうして占領終了後、日本人は、はじめて死者たちと何きがねなく対面できるようになったのにもかかわらず、それを避け、彼らに対し、見て見ぬふりをするようになる。ゴジラは一九五四年、そういう彼らの前に、南の海の底から現れるのである。(強調は筆者)★7

日本の正義を信じ、命を捨てた英霊たちを「裏切ることなく」、原爆を投下されようが最後の1人になるまで徹底抗戦し、「一億玉砕」をすべきだったと加藤は考えているのだろうか。それとも、現在の日本人がアルカイーダのごとく、アメリカにゲリラ的な抗戦を続け、自爆テロを敢行し続ける闘士であって欲しいということなのだろうか。加藤にとって、日本人が何をすれば英霊たちに報い、「責任をとった」ことになるのだろう。何をしたところで、死者たちは生き返りはしない。無意味な死に無理矢理、意味を与え直したところでむなしい。もともと人の生とはそのような矛盾に満ちあふれているのであり、その矛盾に耐えて生き抜くことこそが大切なのではないのか。加藤の議論は、しょせん、いつかは死すべき生を生きているにすぎないにもかかわらず、それでも一生懸命に生きようとしている人間の姿を、一貫性を欠くものとして嘲笑するような議論に似ている気がしてならない。

ゴジラとは何であり、なぜゴジラは日本ばかりを襲うのか。身も蓋もないことだがその答えは実は簡単でもある。ゴジラは日本の映画会社、東宝が生み出したドル箱キャラクターであり、シリーズ化が大成功を収めはじめた62年の「キングジ」以降、松竹映画の『男はつらいよ』シリーズと並ぶ東宝のドル箱作品、『若大将シリーズ』や『駅前シリーズ』に続く、3匹目のどじょうを狙った、誰もが安心して見ることのできる、つまり先のストーリー展開を予想できる水戸黄門型の「定番」シリーズ化の産物であったからというのがその答えである。しかし、いやしくも評論を行う者、つまり私に求められているのは、実態がどうであれ、この作品群をどう面白く、かつ有益に解釈するかであろう。そこで私は「ゴジラとは何であり、なぜゴジラは日本ばかりを襲うのか」という当初の問いにも答えるべく、「ゴジラとはその時代、時代の日本人のアイデンティティと世界に対する意識が表象する存在である」との仮説を提示してみたい。端的に言えばゴジラは日本人に他ならなかったのである。

3　ゴジラにおける日本人の「安全保障」観の変遷

しかし、それにしてはゴジラはなぜ日本を襲うのだろう。水爆実験を行

ってゴジラを怒らせるようなまねをしたのは日本ではなくアメリカなのであって、その怒りを日本にぶつけるのは御門違いなのではないか。この視点から川本〜加藤とは異なる結論にたどり着いているのが佐藤健志である。ゴジラは本来はアメリカを攻撃しなくてはならないのに、日本を襲ってくるのはそこに「ひがみ」の構造が介在しているからだと佐藤は述べる。「日本は超大国（とくにアメリカ）の勝手な行為の巻き添えを食ってばかりいる★8」。

「ひがみ」とは自分ばかりが損な役回りを演じさせられているという一種の被害者意識である。戦後10年経った1954年当時の日本人はこの種の被害者意識の虜になっていたのだろうか。

「初ゴジ」のなかに次のようなシーンがある。舞台はゴジラの2度目の上陸に備え準備を整えている東京の山根博士邸である。

このような国難の時期であるというのに、何を考えているのか、芹沢博士から、事実上、彼の婚約者同然であった山根博士の娘、恵美子を奪い、彼女との結婚を目論む尾形は、山根博士に言う。「ゴジラこそわれわれ日本人の上に、今なお、おおいかぶさっている水爆そのものではありませんか！」

これに対し、ゴジラを殺すことに断固として反対する山根博士は言う。「その水爆の放射能を受けながら、なおかつ生きている生命の秘密を、なぜ解こうとはしないんだ！」

尾形の立場こそ佐藤健志の言う「被害者意識」をむき出しにしたものだ。彼が訴えているのは日本は、アメリカに原爆をおとされ、ただでさえ多大な被害を被ったのに、またも「今なお」アメリカのせいでゴジラという核の脅威にさらされていることへの不満である。この憤りは尾形が佐藤健志と共有する被害者意識である。

ここには先に見ておいた、加藤が示しているような加害者にして被害者という両義性の感覚はない。しかしそれ以上に気になることがある。この問題は広島にある原爆死没者慰霊碑に刻まれた碑文をめぐってかつて行われた論争を想起させるものがあるのだ。そこには次の文句が刻まれている。「安らかに眠ってください、過ちは繰り返しませぬから」。

戦後になって広島を訪れたあの東京裁判のパル博士はこの碑文を見て激怒したそうである。日本語の常として、この碑文の文句には主語が欠けている。過ちとは何で、それを繰り返さないと誓っている主体は誰なのか。

パル博士は、原爆を投下したのはアメリカであり、その意味でなら過ちを犯し、反省しなければならないのはアメリカ人であって日本人ではないと考えた。百歩譲って、「過ち」ということがもし原爆投下にいたる先の戦争全体のことであるとしても、これに対しても日本に責任はない。なぜならば先の戦争の種は西洋諸国がアジア侵略を行ったことに起因しているからだ。パル博士の怒りは要約するとこういうことであった。宗主国イギリスに蹂躙され続けてきたインド人である彼の立場は東京裁判の時から変

わらず一貫している。

それでは一体、何が過ちであったのか。国家に交戦権を与えてしまい、自決権、主権の名の下に普遍的で理性的なコントロールをうけることなく、他者を、都市全体を、ひいては一国家全体までをも破壊することが可能な世界を作り出してしまったことが「われわれ」の過ちなのである。

碑文の筆を執った英文学者でもある雑賀忠義広島大学教授はみずから、それを次のように英訳している。Let all the souls here in peace; For we shall not repeat the evil. このweとは日本人であるとか、アメリカ人を指すのではない。論争を受けて、1983年11月3日に付け加えられた慰霊碑への説明板にはこう記されている。「碑文はすべての人びとが原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である。過去の悲しみに耐え憎しみを乗り越えて全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻み込まれている。」過ちとは、いつも他者に転嫁されがちなものだが、その「被害者意識」や「ひがみ」からは何も生産的なものは生まれない。

ゴジラはおそらく、一方で「GMKゴジ」が描き出しているように、先の戦争で「難死（小田実）★9」したすべての人の残留思念の集合体であろう。そこには川本〜加藤が想定しているような「英霊」だけではなく、日本軍の侵略の犠牲になったアジアの人々、故郷から遠く離れた太平洋の島々で戦死したアメリカ軍人、そして原爆の犠牲となったヒロシマやナガサキの人々、これらがひとつになった怨念の集合体なのだ。だからこそゴジラは反戦のシンボルなのである。

山根博士はゴジラを怪物や日本を襲撃してくる敵とはとらえずに「水爆の放射能を受けながら、なおかつ生きている生命」と位置づけていた。しかし水爆実験の被害や脅威にさらされていたのは何もゴジラだけでも、日本人だけでもない。人類全体がその脅威にさらされていたのだ。だからこそ世界で唯一、原爆による放射性物質の被害を受けたわれわれ日本人が、被害者でもあり加害者でもあるがゆえに、過ちの何たるかを理解したわれわれ日本人が起点となって世界に平和と核廃絶を訴えていかなくてはならないのである。つまりゴジラは「人間」であり「日本人」の心であって、だからこそ水爆実験によって目覚めてしまったゴジラは日本を目指す。それではなぜ繰り返し日本にくるのか。それは日本人が唯一の被爆国であるにもかかわらず、自分たちに課せられた歴史的使命を忘却しようとするからであろう。忘れかけたとき、ゴジラは舞い戻り、われわれの覚醒を促すのである。

ゴジラ・シリーズを日本人の「ひがみ」の構造としてしかとらえることのできない佐藤健志は第2作「逆ゴジ」にも日本人が一方的に被害者であるという被害者意識の構造を読み取る。「逆ゴジ」は西日本沖の小島に不時着した日本人パイロットがゴジラとアンギラスの死闘を目撃するシーン

から始まるが、これはソ連の核実験で目覚めたアンギラス（映画中ではそのような事は全く語られていないのだが）とアメリカの水爆実験で目覚めたゴジラの戦いに、無関係な日本人が巻き込まれるという、朝鮮戦争を暗示したシチュエーションから始まる★10 と主張されているのである。

しかし作品全体からそのようなメッセージを読み取ることが出来る部分はまったくといっていいほど存在しない。

むしろ注目しなくてはならないのは次の点だろう。ゴジラが日本人の心を表象しているとするならば、前作の「初ゴジ」が描き残したままの、もうひとつの日本を示しておくことがこの第２作の課題であったように私には思えるのだ。つまり、廃墟から再び立ち上がろうとする日本の「戦後復興の槌音」がそれである。

たしかに「初ゴジ」はあきらかに反戦映画であった。夜間に東京に襲来するゴジラは東京大空襲の記憶を呼び起こすものであったし、ゴジラの被害にあって病院で治療を受ける犠牲者が描き出されるシーン、被災した子供たちに向けたガイガーカウンターが異音を出すシーンは広島の惨状の再現である。また映画の結末で、自らが思いがけず発明してしまった究極の環境破壊兵器、オキシジェン・デストロイヤー、それを対ゴジラ兵器として使用することに激しく抵抗する芹沢博士の姿は原爆を開発し、自分たちの反対を押し切ってそれを使用されてしまった科学者たちの苦悩をトレースしている。端的に言えば「初ゴジ」のイメージはひたすら暗いのである。

それに引き替え、「逆ゴジ」はそれと対照的と言っていいほどあっけらかんとした、どこか明るいトーンが基調になっている。明白な反戦映画であった前作とは異なり、アメリカンテイストな活劇色が前面に打ち出され、若い主人公たちの恋愛グラフィティも盛り込まれている。たしかにゴジラとアンギラスは、上陸を阻止しようとする防衛隊の照明弾誘導作戦の、思わぬ誤算からの失敗によって大阪に上陸し、激しい格闘をはじめてしまう。その結果、大阪の街は壊滅し、大阪城も崩落してしまう。戦いはゴジラの勝利に終わり、アンギラスは絶命し、悠々と海に戻っていくゴジラなのだが、前作のような暗さが感じられないのである。破壊された街を前に、「かならず立ち直ってみせるよ、まあ安心していてもらいたい」と語る漁業会社の社長。懸命に復興活動にあたる人々のあいだには笑い声すら絶えない。

これが第１作と一対をなし、その暗さを補完するもうひとつの日本人の姿である。破壊と戦禍の前に絶望するだけでなく、すぐにそこから立ち直ろうとする姿…どこか 3.11 以降の日本の姿を先取りした、もうひとつのゴジラがそこにある。

映画の後半で、防衛隊と民間人パイロットの勇気とアイディアを結集した決死の作戦が功を奏し、ゴジラはオホーツク海の孤島、神子島の氷山の中に封じ込められて終結する。

ゴジラを単なる反戦映画とみる見方が皮相であるのは、この陽の側面に目を覆う過ちを犯した結果といえるだろう。

「南洋に散った戦没者の霊魂」という側面も持つゴジラの「故郷参り」の旅は第1期草創期の作品でひととおり全国の主要都市を巡り終える。第1期中期にはいり「三大怪獣」(64)以降のゴジラの変貌は、実はゴジラが日本人を象徴するものからアメリカを象徴するものに代わったことを意味している。不平等条約にすぎなかった日米安全保障条約が1960年6月23日に改定され、この条約に基づき、それまで日本において占領政策を実施してきた連合国軍最高司令官総司令部のアメリカ軍部隊は在日米軍となり、他の連合国軍部隊が撤収した後も日本に留まった。それと期を一にして、いつも海から現れて海に消えるという行動パターンを繰り返してきたゴジラはこの作品以降、日本の地にとどまり、常時駐留するのである。

その後のシリーズは低落の一途をたどる。ゴジラが作品中で果たす役割も、わざわざゴジラを登場させる必然性があるのか不明なものが多い。そういうなかで注目すべきなのは68年の「総進撃ゴジ」である。

この作品の舞台は20世紀末の地球であり、そこでは「国連科学委員会」が硫黄島に宇宙空港を作るかたわら、小笠原諸島周辺を利用して「怪獣ランド」なるものが建設され、世界の恐怖の的であった怪獣をそこに集めて、研究が進められていた。問題はなぜ「怪獣ランド」が小笠原に建設されたかである。ひとつにはこの映画が公開される1ヶ月ほど前に、アメリカ海軍の軍政下にあった小笠原諸島が日本に返還されたことがある。それを記念してこの映画が作られたということは想像に難くない。もうひとつは小笠原の地理的位置である。小笠原諸島は東京とグアムを結ぶ中間地点に点在する島々である。いわば近代日本が「南洋」に向けてきたまなざし、つまり南進論の最前線基地といってもよい。ほとんどの怪獣がなぜか南の島から日本をめざしてやってくることもこのことと無縁なのではない。「南洋」のイメージは日本にとって、ユートピアの人外魔境なのであり、日本版の「高貴なる野蛮」のイメージを支える近代理性を超え出た獣性の宝庫なのである。それと同時に、もしゴジラが日本の守護神であるとするなら、かつて日本の本土に襲来し、東京を空襲した「敵」の発進基地を監視する必要もあるだろう。その意味でも小笠原は最適の最前線基地なのである。

さて、『ゴジラ大辞典』★11によると、もともとはこの「総進撃ゴジ」でゴジラ・シリーズはひとまず終結する予定だったそうだ。しかしこれがゴジラ・シリーズの最終作になることは許されなかった。戦後の総決算がなされるには、小笠原の返還でけりがつくはずがない。沖縄が残ったままだからである。ゴジラ映画の総決算は沖縄を舞台にした『ゴジラ対メカゴジラ』(1974)(「メカゴジ」)の制作を待たなければならなかったのである。ま

ずあらすじを述べておこう。

沖縄の玉泉洞付近に基地を建設した「ブラックホール第3惑星人」は、ゴジラ打倒のために「メカゴジラ」を建造する。当初はゴジラの皮をかぶり、ゴジラを偽装するが異変に気がついたアンギラスは本物のゴジラを呼びつつ、みずからメカゴジラを攻撃するも、メカゴジラの圧勝に終わる。

なおも破壊を続けるメカゴジラの前に、今度は本物のゴジラが現れる。2頭の勝負は、痛み分けに終わるが、その頃、予知能力を持った少女、那美の歌によって沖縄の守り神にして伝説の聖獣キングシーサーが覚醒し、メカゴジラに立ち向かう。しかし修復・強化されたメカゴジラのパワーの前にキングシーサーは劣勢だ。そこに現れるのが雷にうたれてパワーを充電したゴジラで、キングシーサーと協力してメカゴジラと戦う。2体が力をあわせても苦戦し、一時はピンチに陥るゴジラとキングシーサーだが、雷のエネルギーで全身を磁性体に変える超能力を獲得したゴジラは、メカゴジラを吸い付け、スリーパーホールドでその首をへし折った。勝利し、侵略者の基地も破壊したゴジラは海へ帰り、キングシーサーも再び玉座で眠りについて映画は終了する。

昭和ゴジラ・シリーズでは、もう一作、『メカゴジラの逆襲』が作られるが作品論的に語られるべき内容は特にない。子どもの呼び声だけで一瞬にして姿を現すゴジラは、完全にウルトラマンのライバル、いやそれ以下のただの日本の用心棒と化してしまっている。

いずれにせよ、この沖縄の守護神まで味方に引き入れることによって、日本の戦後は終わった。と同時に、日本守護の呪術的な包囲陣を完成させてゴジラ・シリーズも完結した。

1984年に復活した第2期の平成ゴジラ・シリーズでは、原子力発電所が「ゴジラのエサ」と呼ばれ、ゴジラが日本に上陸するのは、原発があるからだという設定に変えられている。ゴジラが最初に上陸するのは、当然のこととして東京ではなく静岡県の「井浜原子力発電所」である。これはおそらく、今や3.11以降、運転停止を余儀なくされたが76年に運転を開始した比較的に新しい浜岡原発のことであろう。ゴジラは原子炉建屋を破壊し、格納容器を取り出し、放射性物質をたっぷり吸い込むのである。生物物理学者の林田信（夏木陽介）たちは、防護スーツも装着せず至近距離まで近づくのだが、3.11以降、このシーンに違和感を感じない日本人はおそらくいないだろう。

この復活した平成ゴジラ・シリーズで当初、めざましい活躍を見せるのは意外にも自衛隊である。密かに首都防衛戦闘機スーパーXという、対ゴジラ戦用の「防衛」兵器を建造していた自衛隊はカドミウム弾で原子炉に擬せられたと言うより、歩く原子炉であるゴジラを制御しようと試み、ほとんどこの作戦は成功する。その自衛隊の足を引っ張るのがソ連やアメリカの核超大国なのである。ゴジラに対して、当初から戦術核兵器の使用

を強硬に主張する両国（実は実戦テストをやりたいにすぎないのだが）に対して、三田村首相（小林桂樹）は非核3原則を持ち出してこれを拒絶する。しかしソ連によって誤発射されてしまった衛星核弾頭ミサイルと、それを迎撃した嘉手納基地発射のミサイルが、自衛隊のスーパーXによって倒されたゴジラの横たわる新宿上空で爆発するや、事態は一変しゴジラは復活してしまう。自国の国益しか考えない超大国によってせっかくの自衛隊の功績はだいなしにされてしまう。

91年の「ギドゴジ」に登場してくるエミー・カノーの役回りも示唆的である。彼女は23世紀からやってきた日本人の末裔らしい。実は日本は23世紀に覇権国となっているのだが、その日本の勢いをそぐために未来の西洋人たちは陰謀をめぐらし、ゴジラの代わりにキングギドラを20世紀の日本に誕生させて日本を壊滅させようとするのである。当初からこの計画に懐疑的だったエミーは西洋の未来人たちを裏切って現代日本人の味方になるのである。

これらの中期の作品に見て取れるのは、「もはや戦後ではない」と自信をつけた日本の自負心であろう。

その後の作品である93年の『ゴジラvsメカゴジラ』（「ラドゴジ」）や94年の『ゴジラvsスペースゴジラ』（「モゲゴジ」）でゴジラの相手をするのは自衛隊ではなく国連のG対策センターである。時はあたかも湾岸戦争が終結し、国連のPKO活動に対する期待が世界的規模で高まっていた時代であり、ゴジラ・シリーズもその刻印を受けているのである。しかしそのような国連への期待は長く続きはせず、早くも95年の『ゴジラvsデストロイア』（「デスゴジ」）では頼りにならぬ国連に見切りを付けて自衛隊が戻ってくる。ここでも核攻撃を想定して建造されたという「防衛兵器」スーパーXⅢが大健闘を見せる。火器しか装備していないためゴジラに対して有効な作戦を立てられない国連のGフォースに代わって、各種冷凍兵器を装備した陸上自衛隊とその司令船スーパーXⅢは、ゴジラとの戦いで空中に逃げたデストロイアにとどめを刺した後、メルトダウンを始めたゴジラに冷凍兵器の残弾すべてを浴びせかけて、ゴジラの最期を見届けた。すさまじい量の放射性物質が巻き散らかされ、死の町と化すかにみえた東京だが、映画の最後の最後で急激に放射能のレベルが下がっていく。ゴジラ・ジュニアがそれを吸収し、次のゴジラとして復活をとげたからだろう。

第3期の『ゴジラ×メガギラス』（「ギラゴジ」）に至っては、マイクロ・ブラックホール発生衛星兵器である「ディメンジョン・タイド」という究極の兵器まで、「防衛兵器」として自衛隊は装備することになる。第3期ミレニアム・シリーズに登場するメカゴジラが装備している、物体を分子レベルで破壊してしまうアブソリュート・ゼロ（三式絶対零度砲）などの兵器開発は、どう考えても防衛兵器の範疇を逸脱している。

しかし極めつけはここでもやはり2001年の「GMKゴジ」である。この作品を迎えて、はじめて防衛軍に格上げされた自衛隊であるが、バラゴ

ン、モスラ、ギドラという3匹の「護国聖獣」、そしてその3体が倒されたあと、その魂が合体することによって誕生したキングギドラという大和の守り神とともに戦う防衛軍は、神の国、日本の防人として、なぜか武器では殺すことの出来ないと説明されていたばかりのゴジラの体内まで潜水艇で侵入し、ゴジラを内破するかたちで勝利するのである。

もっともこのような物理的破壊で亡霊を倒すことなどできないのは言うまでもないことなのだが…。

ゴジラはこれまでも、これからも矛盾に満ちた両義的存在であり続けるのかもしれない。登場するたびに、その性格付けがまったく一変するゴジラの最大のライバル、キングギドラ（ゴジラ映画への登場回数は怪獣の中で群を抜く）よりはましであるが。

註

☆1 ── 次頁に本書で頻繁に用いることになる年表を示す。作品名の略記は、この年表で用いた、ゴジラ・スーツ名由来の、ゴジラファンにはお馴染みの略記を用いることにする。

☆2 ── ゴジラが「吐いて」いるものが何なのか、論争がある。一般には「放射能」と言われており、そのことは「初ゴジ」のポスターにも記されている表現「ゴジラか、科学兵器か。驚異と戦慄の一大攻防戦！　放射能を吐く大怪獣の暴威は日本全土を恐怖のドン底に叩き込んだ！」からも読み取れる。しかし衆知のように、これは放射能という言葉の完全な誤用である。放射能とは、あくまで原子核が崩壊して放射線を出す能力のことであって、日本語では放射能と放射性物質と放射線とが混同されがちであった。その意味で「放射能を吐く」という表現が誤りであるのは確かだがそれでは何を吐いているのか。「ゴジラは水爆実験や原発を襲ったとき、放射性物質を多量に摂取していて、これらの放射性核種が体内に存在し続け、放射能火炎を吐くときに口から放出される」と説明しているのは『ゴジラ生物学序説』（サーフライダー21編、扶桑社文庫）である。ゴジラが原子力発電所や原子力潜水艦を襲い、放射性物質を食べるシーンは「84ゴジ」にも出てくるがそのことに加えて、放射性物質をゴジラは「骨」に蓄えると想定した上で、この書物では最終的にゴジラが吐く放射能火炎の中の成分を「核分裂で多量に発生したストロンチウム90などを含む核反応生成物」と推定しているが、ここでは無難な「放射能火炎」という表現を用いておくことにする。

☆3 ── 川本三郎「ゴジラはなぜ〈暗い〉のか」（『今ひとたびの戦後日本映画』、岩波現代文庫所収）、86〜87頁。

☆4 ── 同上、88頁。

☆5 ── 赤坂憲雄「ゴジラは、なぜ皇居を踏めないか」『映画宝島　怪獣学・入門！』、JICC出版局、1992年、14頁。

☆6 ── 加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』、岩波書店、2010年、169〜170頁。

☆7 ── 加藤、前掲書、195〜196頁。

☆8 ── 佐藤健志『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』、文藝春秋、1992年、92頁。

☆9 ── 小田実『「難死」の思想』、岩波現代文庫、岩波書店、2008年。

☆10 ── 佐藤、同上。

☆11 ── 野村宏平編『ゴジラ大辞典』、笠倉出版社、2004年。

（はぎわら　よしひさ・慶應義塾大学法学部教授／政治哲学・現代政治理論）

ゴジラ・シリーズの変遷と日本の安全保障に関わる出来事

日本および世界の出来事		ゴジラ年表（ゴジラスーツ略名〈　〉は前作と同じスーツ）	
年　月　日	項　　目	年　月　日	項　　目
1945／08 1945／08／15	広島（／06）・長崎（／09）への原爆投下 太平洋戦争終結（日本の無条件降伏）		
1946／04／10 ／11／03	婦人参政権の結果、日本初の 39 名の女性議員誕生 日本国憲法公布（9 条　戦争の放棄）		
1949／08／29	ソ連原爆実験		
1950／06／25	朝鮮戦争勃発		
1951／09／08	サンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約調印		
1953／07／27 ／08／12	朝鮮休戦協定調印 ソ連水爆実験		
1954／03／01 ／06／09	米水爆実験によるビキニでの第 5 福竜丸被爆事件 自衛隊法公布	1954／11／03	『ゴジラ』（初ゴジ）
		1955／04／24	『ゴジラの逆襲』（逆ゴジ）
1956／10／19 ／12／18	日ソ国交回復 日本国連加盟		
1957／10／04	ソ連スプートニク打ち上げ成功		
1960／06／23	日米安全保障条約改訂		
1962／12	キューバ危機　　**漫画「おそ松くん」連載開始**	1962／08／11	『キングコング対ゴジラ』（キンゴジ）
		1964／04／29	『モスラ対ゴジラ』（モスゴジ）
		／12／20	『三大怪獣　地球最大の決戦』〈三大怪獣〉
1965／02／07 ／05／04	アメリカの北ベトナム攻撃開始 日本の商用原子力発電（東海村）開始	1965／12／19	『怪獣大戦争』（大戦争ゴジ）
1966／07／17	**『ウルトラマン』放映開始**	1966／12／17	『ゴジラ・エビラ・モスラ　南海の大決闘』〈南海ゴジ〉
1967／12／11	佐藤総理「非核三原則」をはじめて明示	1967／12／16	『怪獣島の決戦　ゴジラの息子』（息子ゴジ）
1968／06／26	小笠原諸島がアメリカより返還される	1968／08／01	『怪獣総進撃』（総進撃ゴジ）
1968～69	学生運動激化・東大入試中止（1969／03）	1969／12／20	『ゴジラ・ミニラ・ガバラ　オール怪獣大進撃』〈大進撃〉
1970／06／23	日米安全保障条約自動継続		
1971／06／17	沖縄返還協定調印	1971／07／24	『ゴジラ対ヘドラ』〈ヘドゴジ〉
1972／50／15	沖縄施政権日本に返還	1972／03／12	『地球攻撃命令　ゴジラ対ガイガン』〈ガイゴジ〉
		1973／03／17	『ゴジラ対メガロ』（メガロゴジ）
		1974／03／21	『ゴジラ対メカゴジラ』〈メカゴジ〉
1975／04／03	ベトナム戦争終結	1975／03／15	『メカゴジラの逆襲』（メカ逆ゴジ）
1979／03／28	スリーマイル島原発事故		
1980／09／22	イラン・イラク戦争開始		
1983	全欧で反核運動激化		
		1984／12／15	『ゴジラ』(84 ゴジ)
1986／04／26	チェルノブイリ原発事故		
1988／08／20	イラン・イラク戦争終結		
		1989／12／16	『ゴジラ vs ビオランテ』（ビオゴジ）
1990／08／02 ／10／03	イラクがクウェートに侵攻 東西ドイツ統一		
1991／01／17 ～02／28 1991／04／24 1991／12／25	湾岸戦争 自衛隊ペルシャ湾派遣 ソ連の社会主義体制崩壊	1991／12／14	『ゴジラ vs キングギドラ』（ギドゴジ）
		1992／12／12	『ゴジラ vs モスラ』（バトゴジ）
		1993／12／11	『ゴジラ vs メカゴジラ』（ラドゴジ）
		1994／12／10	『ゴジラ vs スペースゴジラ』（モゲゴジ）
1995／01／17	阪神・淡路大震災	1995／11／09	『ゴジラ vs デストロイア』（デスゴジ）
1998／12／	米英によるイラク空爆（砂漠の狐作戦）	1998	米 “GODZILLA”
1999／05／28	周辺事態法制定	1999／12／11	『ゴジラ 2000 ミレニアム』（ミレゴジ）
		2000／12／16	『ゴジラ×メガギラス G 消滅作戦』（ギラゴジ）
2001／09／11 2001／10／07	米国で同時多発テロ発生 米国がアフガニスタン攻撃開始	2001／12／15	『ゴジラ・モスラ・キングギドラ　大怪獣総攻撃』（GMK ゴジ）
2002／04／16	有事法制関連法案閣議決定	2002／12／14	『ゴジラ×メカゴジラ』（機龍ゴジ）
2003／03／20 ～05／01 2003／12／26	米軍によるイラク戦争 自衛隊イラク復興支援派遣開始	2003／12／13	『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ　東京 SOS』（GMMG ゴジ）
		2004／12／04	『ゴジラ　FINAL WARS』（GFW ゴジ）